

平面ひずみモデルによる砂地盤の支持力と内部変形について（その1）

錢 高 組 正員 ○ 藤 原 正 明
鹿島建設 正員 飛 田 研一郎

1. まえがき

隣接する基礎による地盤の支持力、沈下および振動荷重を受ける地盤の支持力、沈下、ならびにその時の地盤内部の変形状態を明らかにする目的で実験を行なつた。地盤内部の砂粒子の変位量を測定することにより、変位の影響範囲、すべり線の形状が明らかとなり地盤内部のひずみ分布も算定できるので要点を報告する。

2. 実験

2-1 実験装置

平面ひずみ状態を仮定した土槽と載荷装置を用いる。土槽は $150\text{cm} \times 10\text{cm} \times 70\text{cm}$ の鉄製で前面は写真撮影のために厚さ 1.5mm の強化ガラス、背面は砂試料および指標棒のセットのため段階的に取りはずし可能な構造、載荷板は 10cm 正方形底面の鉄製直方体のものを用い、支持棒上をスライドさせて間隔を変化させる。載荷装置は油圧式の応力制御型で最大 2t の静荷重と土 0.5t の動荷重が載荷でき、振動数、波形とも変化できる。

2-2 実験方法

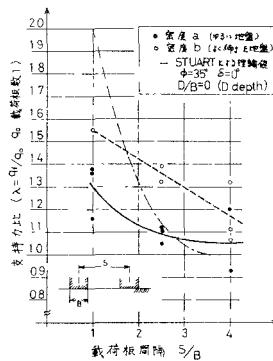
豊浦産の標準砂を用い、砂層は各層 (2cm) ごとに板で押える程度と板の上からゴムハンマーで締め固める場合の二種類とし、指標棒のセットと交互に行なう。指標棒は径 2.5mm の竹ひごを前の部分に螢光塗料を塗つて使用し、ガラス面の指標交点に密着させてセットする。載荷方法は前述の装置を用い、載荷板間隔を変化させてそれぞれ静的、振動載荷を行なつた。荷重一沈下量はコードセル、差動トランス型変位計により X-Y レコーダーに通し直接描いた。同時にダイヤルゲージによりチエックする。内部変形は各荷重レベルごとに砂層中の指標棒の定まからの変位量を写真撮影し、コンパレーターにて読み取る。

3. 実験結果と考察

3-1 极限支持力と沈下特性について

(1) 載荷板間隔による支持力の相違

ゆるい地盤 ($\gamma = 1.63 \text{ g/cm}^3$): $S/B \geq 3$ では載荷板相互の影響をほとんど受けず、 $S/B = 2$ において急増する。又縮つた地盤 ($\gamma = 1.69 \text{ g/cm}^3$): $S/B = 4$ でも影響を受け、載荷板が近づくにつれ極限支持力は直線的に増加するが、 $S/B = 1$ においてそれそれ支持力比は $1.3, 1.56$ で理論値よりかなり小さくなつた。（図-1）



支持力比-載荷板間隔-深度図

Fig. 1

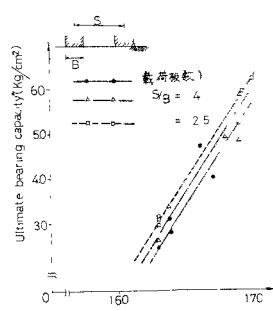


Fig. 2

3-2 地盤密度による支持力の相違（図-2）

支持力と 密度の関係は載荷板の間隔に関係せず同じ勾配の直線となつた。その関係は次の様と表わされる。

$$Q_s = Q + 4 \times 10^4 \cdot \gamma$$

..... (1)

ここに、 Q_s : 荷重強さ (kg/cm^2) , γ : 単位体積重量 (g/cm^3) , Q : 載荷板間隔に依存する。

(3) 振動荷重による支持力と沈下 (図-3)

振動荷重は最大荷重 (Q) を静的極限支持力の $\frac{1}{2}$ の場合, 支持荷重を $\frac{1}{2}Q$ 与え、以後 $\frac{1}{2}Q$ の正弦波荷重を 0.5 c.p.s. で与える。図-3 に縮つた地盤における一例を示す。始めは沈下速度は漸減しているが、一定時間後急増し極大化を示す。この時疲労による砂粒子のかみ合わせが減少してせん断破壊が生じたものと思われる。今後地盤密度を変化させた場合のエネルギー量と破壊に到る時間の関係を研究する必要がある。

4. 内部変形について

(1) 破壊領域 指標変位よりすべりの形状が明らかとなり破壊領域が求まる。鉛直方向については地盤の密度、載荷板間隔に影響されず一致する。又理論値 ($\phi = 30^\circ, \phi' = 0^\circ$ の場合の板幅つり合い理論) ともほぼ一致する。水平方向については十倍の大きさの影響を受けかなり小さくなつた。又振動載荷の場合、垂直、水平共静的載荷の $70\sim80\%$ となつたがこれも支持力と同様なことか言える。(表-1)

(2) ひずみ分布

載荷板直下に塑性核が存在しひずみは小さいが載荷板端部から核の周辺において急増する。これは核の部分かまわりの土を押しつけ ϵ_x は引張り, ϵ_y は圧縮ひずみが生じるために沈下が進行するほど顕著となる。又載荷板より外側においては ϵ_x より ϵ_y の増加が著しい、これはせん断破壊後砂粒子は横方向よりも浮き上がりの力を大きく受けると思われる。(図-4(a), (b)) 振動載荷の場合塑性核の存在が不明瞭で、載荷板直下で最大値を示し、以下距離に従つて減少する。 ϵ_x は急激に減少するが、 ϵ_y はかなり下方まで影響が及ぶ、しかし静的載荷よりかなり小さい。

5. あとがき

今回は主に実験結果について述べたが、ひずみ分布からモデルの破壊状態に比較的近いと思われる直接せん断試験のデータをもとに応力分布を求め、又理論的解析として極限つり合い理論及び弾塑性 F. E. M. 解析を試み、実験値との比較を行なつておるので、次の機会に発表する。

TEST NO 22 (a-6)
 $q=50/100=q_1=25 \text{ kg/cm}^2$
 $q_2=64.09 \text{ kg/cm}^2$
0.5 cps

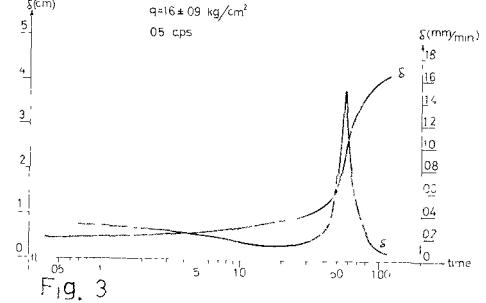


Fig. 3

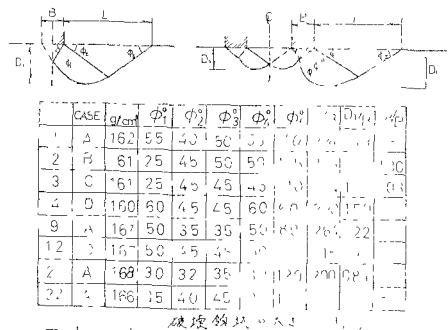


Table 1
破壊領域の大きさ

TEST NO 1
Stage 3
 $= 1.78 \text{ cm}$
 $= 3.0 \text{ kp/cm}^2$

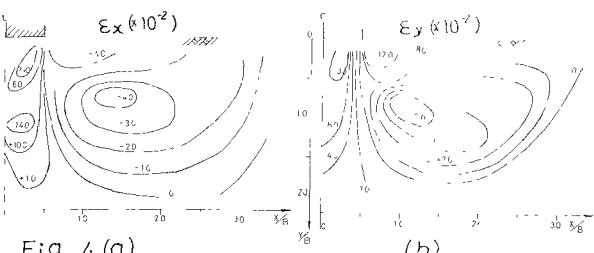


Fig. 4 (a)

(b)